

菅江真澄における和歌と民俗

——旅日記『伊那の中路』の方法——

錦 仁

一 はじめに

江戸時代の紀行家で菅江真澄にまさる人はそれほどいないだろう。長いこと書き続けた絵入りの紀行日記や地誌を読むと、中央から遠く離れた信越、東北、北海道などの山かげの村、海辺の村を見て歩き、人々の生活やありさまを威張らない目で細やかに描写し、かれの優しい人間性と独自の思想がにじみ出ている。あたかも自分も一緒に暮らしているような臨場感あふれる観察をしている。

真澄の著作は、旅日記、地誌、随筆・画集・雑纂の三分野にわたる。『菅江真澄全集』（未来社）は、第一巻から第四巻までが旅日記（四冊）、第五巻から第八巻までが地誌（三冊）、第九巻から第十二巻までがその他（三冊）を収める。最後の三冊は、随筆などのほかに旅日記・地誌の下書き・異文の類もたくさん収録する。

真澄は三〇歳で故郷の三河国を出立し、そのときから絵入りの旅日記を書き始めた。信越、東北、北海道と二〇年ほど見てまわり、秋田に定住する頃になると、自分の歌をほとんど書き込まなくなった。そして、農山村の暮らしや伝承・歴史などをいっそう詳しく書くようになった。文化元年（一八

○四)の『男鹿の秋風』を皮切りに同七年の『氷魚の村君』『男鹿の春風』『男鹿の鈴風』へと続く、いわゆる(男鹿もの)はまさにそうで、秋田県の男鹿半島を集中的に取材した地誌ともいえるべき旅日記になっている。

真澄はこれらの著作によって人生の大きな転機を迎える。茂木知利、那珂通博(碧峯)、鳥屋長秋などの秋田藩士と親交を深め、それが機縁となって藩主の知るところとなり、秋田藩領の地誌を書くようになっていった。^①老年の入り口、五〇歳になる直前のことだった。

当時、旅して歩く人を「遊歴人」とか「漂流人」といった。^②真澄はその種の旅人から地域の民俗・歴史を記録する地誌作者へと変貌した。こうした真澄観は常識といってよいだろう。だが、真澄の歌は拙劣で、そういう貴族的な趣味を捨て名もなき庶民たちの生活を記録するようになったから民俗学の祖として大成した、と考えられているらしい。

本当にそう考えられているとすれば、私は強い疑問を感じる。真澄の地誌が正しく理解されなくなると思うからだ。たしかに自分の歌を旅日記に書き込まなくなったが、和歌に関する伝説・名所・藩主や地元の歌人たちに関する情報は、のちの真澄の地誌からも減ることはない。当時、全国の諸藩は競うように地誌を編んだ。藩撰であれ私撰であり、地誌にはそれらの記事があふれている。真澄が当時の常識に反する地誌を書こうとしたとは思えない。

常識化している真澄観はやはりおかしい。歌を詠み地誌を書く人物は当時珍しくなかった。真澄は晩年になっても歌を詠んだ。生涯に詠んだ歌はおそらく二千首を超えるだろう。^③

真澄はなにゆえに最後まで和歌を手放さなかったのだろうか。地誌にとつて和歌とはなにか、この重要な問題を私たちはよく考えずにきたのである。和歌を民衆の生活に縁遠いものと見なし、和歌を好んだ真澄を消し去り、民俗学の祖として宣揚してきたといえよう。

和歌と民俗はほんとうに対立するものなのか。真澄を民俗学の祖と見なすのはよいとしても、真澄と和歌の関係を正しく捉えなかったところが気にかかる。

二 真澄の歌を除外する

真澄の歌は拙劣きわまりない。そう断じたのは、真澄を民俗の祖と宣揚した柳田国男であった。「我々には一向感銘の無い歌である」、「一首として名歌がありません」、「単に凡庸だといふのみで無く、其吟詠の態度にも、文章の方に現はれて居るやうな真率味がありません」。これほどの酷評もないだろう。柳田国男を師とする内田武志も、真澄の旅日記である「紀行文には、あまり上手でない歌が多数に挿入されており、また難渋な擬古文が今の人たちの感覚にあわず、かえってわずらわしい思いを抱かせ」と批判した⁽⁴⁾。

内田は、東洋文庫の『菅江真澄遊覧記』⁽⁵⁾の現代語訳をするとき、真澄の旅日記から和歌に関する記事をばつさりと切り捨てた。各地の歌枕・名所、都からきて歌を詠んだという平安・鎌倉期の著名な歌人とそれにまつわる伝説も、かれらが詠んだという歌なども、真澄の歌もともに削除した。民俗学の祖たる真澄が工夫して書き入れたであろうに、である。

内田の大胆な削除を見ると、和歌は民俗学には必要はない、という考えをもっていたようだ。意地の悪い見方をするつもりはないが、和歌を詠む真澄、和歌に関心をもつ真澄を嫌っている。和歌など詠まないでくれればよかった、関心などもつてくれなければよかった、というつぶやきが聞こえてくるような気がする。こうした柳田と内田の見解が今日の真澄観の土台となっている。

甚だしい分量が削除された。たとえば『伊那の中路』⁽⁶⁾は全集で数えると七一七行で書かれているが、

そのうちの約三三六行、すなわち原文の約四七%が削除された。現代語訳されたのは約三三六行、原文の約五三%である。和歌の詞書にあたる文と地の文とが重複する行があるので実際は少し減るが、それでも原文の半分近くが現代語訳されずに捨てられた。それが今日もつとも流布している『菅江真澄遊覧記』（平凡社）の『伊那の中路』なのである。原作とかなり違う。読者は民俗の記事だけを読むことになり、和歌の記事がどれほど削除されたかわからない。そこに何が書いてあったのか知らずに読み進めるわけだ。今日の著作権をもちだせば、原作者の真澄が素直に喜ぶとは思えない。

柳田・内田は、民俗学の先駆的偉人として真澄を見だし、高く評価した。そこを強調するゆえに和歌に関する記事を切り捨てた。和歌は上層階級の趣味であり庶民の生活と関係がないというのだろうか。真澄を尊敬するなら真澄の書いた文章のすべてを大切にすべきだろう。和歌と民俗学を対立させ、大胆にも切り捨てたというほかない。

三 旅日記を綴る旅

真澄は、最初の旅日記『伊那の中路』の冒頭に、こう書いている。父母に別れて三河国を出発したが信濃国に入るまでの旅日記は途中、盗賊に奪われて手許にない、と。この言い方が気にかかる。内田によれば、旅立ちは天明三年（一七八三）二月末、三〇歳のときであった。⁶

これと事情が似ているのは、幕末・明治に活躍した国学者の堀秀成（二八一九〜一八八七）である。秀成は二三歳で古河藩（茨城県古河市）を脱藩し、江戸行って昌平黌で佐藤一斎に学び、次いで桑名の富樫廣蔭のもとで国学を修めた。そして自立すると、愛知、岐阜、静岡、山梨、群馬へと旅をし、行く先々で塾を開き、地元の人々を集めて国学を教えた。⁷

堀秀成の旅日記は九種を数える。明治新政府の宣教師（新しい国家の理念と政治を民衆に説いて広める任務を負う）としての旅日記である。そのほか日々の出来事を記した、いわゆる日録が六八歳で没する明治二〇年八月まで遺っている。秀成はこれらの旅日記・日録に茶色の表紙をかけ製本して遺した。同僚および後世の人々に読んで貰うためであった。

秀成はそれ以前から日録をつけていたが、それらは廃棄して遺さなかった。理由はわからない。論語にいう「三十にして立つ」がヒントになるだろう。秀成のような国学者に限らず、師の許を離れて自立してから書いた旅日記・日録を遺すのが作法であったと思われる。真澄も三〇歳で自立し、それまで書いていた日録を捨てた。青年期の自分を卒業し、菓草学を修め、和歌も教えられる独立した人間として旅に出たのだろう。真澄の旅日記は所々に各地の風景を描いた挿絵がはさまれ、文章も柔らかく随筆に近いが、単なる趣味で制作したのではあるまい。いつかだれかの目に留まり、それによってわが人生が打開されると思つて書き続けたのではあるまいか。

真澄は信州で一年半ほど過ごした。その間の著作は六つほど。『伊那の中路』（旅日記）、『わがころ』（同）、『手むけ草』（家集）、『すわの海』（旅日記）、『いほの春秋』（随筆）、『くめじの橋』（旅日記）である。そのうち『伊那の中路』には「異文」三種が遺っており、くらべてみると、異文というよりもそれぞれが独立した別本である。いずれも日にちがダブることなく続いているし、それぞれ製本されて一冊として独立している。合計四種、それぞれ独立した、類縁関係を有する旅日記と見なせるのではあるまいか。

内田の全集「解題」によれば、『伊那の中路』（旅日記）はそれらの別本と『いほの春秋』（随筆）その他を基礎原稿として書き起こしたもので、最終稿の完成はずつとあと秋田に行つてからだという。旧稿をもとに時間をかけて新しい作品に創り上げたのである。

見逃せないのは、『いほの春秋』その他の旧稿では、同じことが書いてあるのに日付が異なることだ。どれが正しい日付なのか証拠がないのでわからない。真澄は日にちに沿ってその日の出来事を正確に書き記したわけでもないのである。ある程度、自由な書き方をしており、創作性の濃い部分も交じっているように見えるべきだろう。

四 『いほの春秋』から『伊那の中路』へ

『いほの春秋』は、信濃国本洗馬に落ち着き、天明三年四月から冬を越して四月になるまでの一年間の生活を書いた随筆である。全集では七頁にもならないが、描写は具体的でよくまとまっている。一方、旅日記の『伊那の中路』も本洗馬における同年三月から十二月までを書いており、分量は四〇頁にも及ぶ。清書本は秋田に入った天明四年九月以降に完成しているので、『いほの春秋』から清書本へのプロセスも考えて検討してみよう。

両者はジャンルも分量も異なるが、どちらも和歌を組み入れて民俗的事象を記録したことがよくわかる。『いほの春秋』の序文と巻頭部分をあげる。

〔序文〕

山家記／われ志那能の国に來りて、かなたこなたをみるとて、しみづながる、柳かげしほしと思ふまゝ、ほとゝぎすを聞、紅葉を折、雪を見、梅をかざすまで、おもへば一とせあまりになりぬ。ある日、可摩永といふ岡のひとつ家にあそびてけふをくらしぬれば、やま住のこゝ、地しければ、いざ此さま、見しこと聞しことを、このいほりにたぐえて、たゝう紙にしるしぬ。

「巻頭部分」

やまさとの垣ねや春をへだつらん、をりしりがほの卯の花に、こよみなき山のおくも、夏とはしりて衣ぬぎかふるころなれば、たが身も木曾の麻ぎぬになりたるは、つらつき、いとすゞしげにものしたり。「中略」初音よりをちかへり鳴郭公のこゑは、山住の身のせにこそ待らめ、「中略」さすとなき柴の戸は、いつも水鶏のたゝきすて、あけぬれど、日の光やまにへだたりて、をそければくらし。

まず指摘すべきは西行への親炙である。西行の『山家集』になぞらえて別名を「山家記」とし、山家（旅の庵）で過ごした一年間を書いたので『いほの春秋』と名づけたという。傍線を引いたところは、西行の有名な「道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ」（『新古今集』夏）という歌をふまえ、思いがけず長居をしたことを言い込め、わが身を東国を旅した西行に重ねている。このあと真澄のめざす旅は西行と同様、みちのくであることを示唆している。

信州最後の旅日記『くめじの橋』に、天明四年六月三十日「みちのおくに、かねていなんところ、ろざせば」とある。そして、敬愛してきた洞月上人と久しぶりに会い、「松島」「宮城野の原」を詠んだ歌を交わしている。真澄はこのあと新潟・山形・秋田・青森・道南・岩手を旅し、天明六年八月、松島（宮城県）の月を眺めた。翌年の七～八年は「宮城野」のある仙台付近で過ごし、春には松島の桜をながめた。旅日記は残っていないが、「宮城野の萩」も見たことだろう。西行没後六百年（五九七年目にあたる）にあやかっつて三河国を出立したのかもしれない。

『いほの春秋』の巻頭は、あたかも一首の和歌のように「山里の垣根や春を隔つらむ折知り顔の卯の花に……」と書き出している。最後を「折知り顔に咲ける卯の花」とでも直せば、たちまち一首の歌

になる。そもそもこの部分は『拾遺抄』夏の「我が宿の垣根や春を隔つらむ夏来にけりとみゆる卯の花（源順）を下敷にしている。そして、「こよみ（暦）なき山のおく」「山住の身」「さすとなき柴の戸」「日の光やまにへだゝりて」と語って行く。仮住まいの「山家」に暮らして自然を微細にながめ、人々の生活をよくよく観察し、「見しこと聞しこと」を書き記したというのである。これは『古今集』仮名序の「心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、言ひいだせるなり」をふまえている。こういうことを確認すると、真澄の外界に対する観照態度がどんなものかよくわかる。和歌なくして自然観照も文章表現も成り立たなかったのである。

院政期の歌論書『俊頼髓脳』の文章とよく似ているので、少しだけ引用してみよう。

のこりの雪の消えうせぬるに、我が身のはかなき事を嘆き、花咲きぬれば、ひとり心のしづかならず、白雪にまがへ、春の雪かとおぼめき、「中略」春の、むなしく過ぎぬるにつけても、いたづらに年をおくることを嘆き、いつしかと時鳥ほととぎすを待ち、やすき夢をだにむすばず、知らぬ山路に日を暮し、思はぬ伏屋ふせにして夜をあかすにつけても、詠むべき節ふしはつきもせず。（日本古典

文学全集『歌論集』所収本）

歌人は、このような自然観照を身に付けて歌を詠むのである。江戸時代の歌人ももちろんそうだった。右の『俊頼髓脳』と同じような文章は平安末期の藤原俊成の『古来風体抄』にも見られる。真澄も源俊頼や藤原俊成の歌論書を読んで知っていたといつてよい。江戸期の歌人は、平安期の歌人と違い、農山村の人々の生活をうたうことはごく普通のことだった。藩主は領内を巡覧し、農民たちの働きぶりを見て歌を詠んだ。地方びとの生活を和歌を詠む心をもって文章を書き歌を詠むことは、真澄

だけのことではなかったのである。真澄を和歌から切り離し、民俗学の分野からのみ評価してはならない。

真澄は和歌を詠む心で自然に親しんでいる。自然の中に身を置き、目の前にあらわれては移りゆく季節の景物・風景を見つめて書いている。そのうえで平安時代の和歌にはあまり詠まれない地方の新鮮な風景を発見し、それにも和歌的な美を見いだして書き留めている。先に引用した巻頭部分からさほど隔たっていないところに、

きのふけふうふるを見しに、乙女ら田面に艸とり渡りて、うへ田はぼさつ田の神と、声もしどろにうたひくく、笠の軒もて、いな葉おしわく。稲葉そよめく風ほしやと、いへるほどなく空かきくれて、なる神の音もしきりになりひらめきて、あめは、さちく(車軸)をながすごとくに、遠の山は、すみ(墨)かきながせり。

とある。田植えが終わり、乙女たちが笠を被り、稲葉を押し分け、田の草取りをしながら民謡をうたっている。暑いので風を期待するが吹いてこない。するとたちまち雷が鳴って雨が激しく降り出す。ほどなく止んで、美しい風景があらわれる。このあと、「稲葉のつゆもましろに、涼しき夕などまたなきながめなれば、かしこくもおもひ入たるものかなと、ひとりこゝろほこりて月のさし入たるを、さもこそあれとおもふ」とある。実に清新な田園風景だ。遠くの風景がズームレンズで大きく浮かび上がるような感覚がする。女たちの姿があざやかに目に浮かび、歌声が響いてくる。

これと発想のよく似た歌は平安時代の昔からあった。最初の歌は、『古今集』秋下の「ほにもいでぬ山田をもると藤衣いなばのつゆにぬれぬ日ぞなき」(読み人知らず)である。中世に入ると、後鳥羽院

の「小山田の稲葉片寄り月冴えて穂向けの風に露みだるなり」、大内政弘の「昨日かも採りし早苗の五月雨ややがて稲葉の露と置くらん」などがある。幕末の『大江戸倭歌集』には、千坂畿という人の「更級や稲葉の露を吹く風に田毎の月の影ぞ碎くる」という歌がある。こういう古歌や同時代の歌がたくさんあることを真澄はよく知っており、その知識を生かして書いたことは明らかだ。

このあと、桔梗の花が咲き、夏は終わり秋が近いであろう、と思いつながら、「麻の立枝」のそよぐのをながめている。そして、今ごろ「世（の）中」では「なごしのはらへ」をしているだろうといふ。ふるさとの三河国だろうか、かつて見た世間のようすを思いやっている。

真澄は、農民たちの働く姿が見える田舎の風景に新鮮な感興を覚えた。そして、和歌の伝統に培われた美的感覚で細かく描写している。「かしこくもおもひ入たるものかな」と述べ、ここにきたのは賢明な判断であったと一人満悦するのである。しかも巻末に、子どもたちのうたう「たんば草のかれぐさ、かれてもかれてもたんば艸」という遊び歌を書き留め、さらに山菜採りの唄をからかう子どもたちの笑い声、柴舟に乗ってはしゃぐ声を書き留めて、こう述べる。

海こそなけれ、空にかりがねの鳴わたる曙、えもいはんかたなし。よるくくの月の朧も、かゝる山里のながめ、世中の人につげまくおもふ…。

「世中の人」に、この「山里」の美しさを知らせたい。『いほの春秋』はそのために書くというのだろうか。夜明けの空を雁が鳴いて渡る、月の光が朧に霞んでいる。まさに和歌的な風景であるが、子どもたちのうたう童歌や農民のようすを記録することと何の矛盾もない。〈和歌〉と〈民俗〉が見事に融合している。

これが旅に生きる真澄の態度であり、旅日記や旅の随筆を書くときに、みずから選んだ表現方法なのだった^⑨。地方の風景や生活を見ることが書くことが一つになっている。

五 同時代の歌人たち

この時代の歌人と和歌について少し眺めておこう。契沖の家集『漫吟集』（龍公美本）の跋文に次の一文がある。書いたのは門弟の渡辺直麿、読み仮名・濁点をつけて引用する。

其事業しげき中にも、こゝろにおもふことを、みる物、聞物につけて、これはしも後の手ぶりのまゝに、よみ出せる哥いとさはなるを、書集て、漫吟集と名づけたる…。

（天明七年、岩波書店『契沖全集』第一三巻）

前半は『古今集』仮名序の「世の中にある人、事・業しげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、言ひいだせるなり」（岩波文庫）をふまえている。後半は「後のてぶりのまゝに」、つまり古い伝統や表現法をとらわれず、おのれの感動を日ごろ使っている言葉で自由に詠んだ、という。すなわち、契沖は『古今集』の歌の詠み方を継承し現代の詞を用いて現代ふうの詠み方をしていくというのである。

同じく門弟の藤原良直が書いた跋文には、「契沖上人の国ぶりこそ、いにしへの万葉集を、とほつおやとして、しかも、そになづめるのみにあらず、おのがまに／＼によみ出たまふげれば、実にひとつの家の風といふべきなめり」とある。「国ぶり」は我が国固有の心の表現である和歌をさす。良直は

直磨と同じことを述べたのである。

順序が逆になるが、右の龍公美本より百年あまり前に『自撰漫吟集』が出版されている。その序文に、清水浜臣が同じことを書いている。

おもふがまゝをいたらぬくまなく、たけくもみやびにもいひつゞけられしなれば、一哥ごとにめづらしくもをかしくもあるぞかし。抑歌は人々の心々をいひあらはすものなれば、かゝる姿もをかしきを、中には誹諧めけるがあるをみて、そゞろたかゝらぬやうにいひなし、おもひおとす人もあるこそ、かへりていかにぞやおぼゆれ。(中略)さるとちには、かゝる哥をも見せて、うたはいかなる姿にも心よりよみうべきわざなるよしも、しらすまほしことにこそ。

契沖は自由な詠みぶりを楽しんだ。人は優雅さ・端正さのない「誹(俳)諧めける」歌が混じっていると非難するが、歌とはそもそも「心々をいひあらはすもの」「心より詠み得べきわざ」であり、心の中を自由に表現するものだ。したがって、そういう歌が混じるのは自然なことであって、和歌の本質から外れているわけではない。そういう詠み方をするのは契沖本人の主張であると述べている。

契沖に対する評価は当ても百年後も同じであった。契沖は『万葉集』をはじめ古典和歌を十分に学んだ国学の大家であるが、自分の生きている時代の言葉を用いて自由に心を表現した。歌とはそういうものだから、「誹諧」めいた変な歌、下手な歌が出てきてもおかしくはない。そこに人間らしさがあり、契沖らしさがあると長年にわたって評価されてきたのである。

こうした和歌観や詠み方は江戸時代によく見られるもので、契沖ひとりに限ったことではない。加藤枝直も村田春海も、物名、折句、杓冠、旋頭歌、長歌、あらゆる歌を試みており、契沖と同じく自

由な詠みぶりをけっして避けていない。

真澄もまた、こうした多種多様な歌を器用に詠みこなし、旅日記にたくさん書き入れた。柳田国男は、あれやこれや器用に詠みこなしたのは、真澄にとつて和歌は所詮、遊びであつて、見知らぬ土地の人々と仲良くなるための方便であつたからだという。民俗調査を円滑にするための社交手段として歌を詠んだというのである。和歌でもつて地元の人々と仲良くできればよいのであつて、上手な歌を詠む必要はなかつた。事実、真澄の歌はひどく下手である、と酷評したのであつた。

こうした柳田の見解はいささか見当違いであるといわなければならぬ。柳田の見解は今も根強く支持されているが、江戸時代の和歌の常識から外れていることを知る必要がある。

真澄の歌はほんとに下手なのか。自分でも下手だと思つていたら、知人・恩人にみずから供覧させた自慢の旅日記にそんな歌を多量に書き入れたりするだろうか。¹⁰一首だけであるが、村田春海の歌とくらべてみよう。

あさ日川夕日の色も堰き入れてくれなゐふかき梅のした水

この歌は、秋田藩九代藩主佐竹義和がたいそう褒めた歌で、真澄はその思い出をくりかえし話題にしている。¹¹旭川の流れが梅の林の下で堰き止められ、屋敷の中の小川に入ってくるのだろうか、夕焼け色に川の水が染まり、白い梅の花も紅く染まり、梅の林の下を静かに流れている。なかなか巧みである。「朝」から「夕」へゆつたりと時間が推移し、「くれなゐ」（紅）には「まだ暮れない」がかけられている。「朝日川」↓「夕日」↓「紅」「暮れない」とイメージが重層化していく。冴えた技巧のだが目立つことなく優美な情景がおのずと浮かんでくる。手練れの歌といつてよいだろう。

「あさ日川」は郊外から流れてくる仁別川のこと、秋田城（矢留城という）に近づくあたりで「泉川」と呼び名が変わり、城下町を通って日本海へ注ぐ。藩主はかねがねこの川を名所らしい名前に替えようと思っていた。その意向を受けた藩主の知的ブレーンの一人、那珂通博（碧峰）は「仁泉」を提案した。一方、真澄は通博をとおして「旭川」を進言した。すると藩主は、通博の案を却下し、真澄の案を採用した。「旭川」は漢詩にも和歌に詠めるからだ。漢詩には「きよくせん」を、和歌には「あさひかわ」を用いればよい。一方、通博の提案した「仁泉」は、「仁別川」と「泉川」を折衷したのだが「じんせん」としか読みようがない。漢詩には使えるが、優美を尊ぶ和歌には使えない。そういう理由で却下されたのである。

右の真澄の歌と比較できそうな春海の歌を探せば、次の一首があげられるだろう。

水上の里はいづこぞ訪ねみん梅が香おくる春の川波

「春の川波」から梅の花の香りがする。どこの梅林の下を流れてきたのだろうか。上流を尋ねて確かめたいものだ、という意味。下句に情景・現象をあげて上句で原因・理由を想像する歌は平安期によく見られるシンプルな構成法だ。かつきりとした句法は男性的な印象を与え、漢学で鍛えた体臭が感じられる。それにくらべると、真澄の歌は感性が柔らかくて優美さが感じられる。

もちろん、桑原武夫の「第二藝術論」をもちだすまでもなく、俳句や短歌（和歌）は名人と素人の区別がつけにくい場合がよくある。読者の鑑賞能力や好みもあるから、真澄の歌を下手だと評してもよいけれども、私たちまでが柳田国男が〈下手だと言ったから下手なんだ〉では困るのではないか。

遠慮なく私の鑑賞を述べることにしよう。『校注国歌大系』の「近代諸家集」に収められた江戸期の

歌人たちを読み通して思うのは、香川景樹はたしかにうまい。良寛にも数ある中に独自の歌がある、などとは思わなければならない。また、江戸時代の真澄の文章を内田が「晦渋な擬古文」¹²と批判するのも見当違いであろう。当時の文章と比較して特にわかりにくいわけではない。江戸時代は平安時代の文章を手本としていたのだから、擬古文になるのは当然なことだろう。

真澄は「俳（俳）諧めける」歌を詠んだときは、「たはれ歌」「戯歌」であると断っている。おもしろいものを見たらおもしろく詠む、という態度である。また、アイヌの集落を訪ねたときは、アイヌ語で五七五七七の歌を詠み、それを初句から順に日本語に訳して一首の和歌に直している。¹³ いろんな種類の歌を詠みこなして楽しむことは当時の歌人には普通に見られ、珍しいことではなかった。藩主ですらそうであり、点取り和歌・点取り俳諧を楽しむ藩主も多かった。¹⁴

六 歌は、だれもが、どこでも詠む

真澄は、和歌をどのようなものと思っていたのだろうか。真澄の歌を拙劣だというなら、当時の和歌観はもとより、『万葉集』以後、日本人がどのようなものとして和歌を考えてきたかを知らなければならぬ。こうした当たり前のことをせずに、真澄ひとりを見魚板に上げて乱暴な批判を浴びせてきたのではないか。

江戸時代は『万葉集』が高く評価された。その理由は、天皇から庶民までの歌が収められ、奈良の都から東国・九州の果てまで、日本のどこでも歌が詠まれていることを証明する古典と見なされたからだ。中国の最初の古典といふべき『詩経』と同種・同等のものとして尊ばれたのである。¹⁵ 一言でい

えば、和歌は神世以来の「国ぶり」「たはぶれあそび」であり、あらゆる階層の人々が歌を詠む。そこに和歌本来の姿、日本本来の姿がある、と考えられてきたのであった。

こうした和歌観を最初に明言したのは、平安時代後期の源俊頼であった。それは歌論書『俊頼髓脳』の冒頭部に示されており、約七〇年後、藤原俊成が『千載集』の序文の冒頭や歌合の跋文にそのまま引用している。かれらは繊細優美な『古今集』を尊重したが、それと同時に、地方庶民の素朴な歌まで載せる『万葉集』を忘れなかった。『万葉集』から『古今集』への道のりには確かに大きな断絶があるが、そのことを認めながらも、古代人の心を受け継いで『古今集』が生まれ、平安時代の優美な和歌へと継承され発展してきたと考えていたのである。

こうした和歌観は、子息の藤原定家を経て為家へ受け継がれたことはいままでもない。江戸時代になると、契沖と親しかった下河辺長流（一六二四～一六八六）は、自撰の『林葉累塵集』序文の冒頭に、「やまと歌は、おほよそわが国民の思ひを述ぶる言の葉なれば、上は宮柱高き雲居の庭より、下は葦葺この小屋のすみかに至るまで、人を分かず、所を撰ばず、みる物によせ、聞くものにつけて、みなその志をいふこととなん」と述べている。和歌は「国民の思ひを述ぶる言の葉」であり、宮廷の貴族から地方の庶民まで、どこでもだれでも歌を詠む、それが日本の古くからの習俗なのだといっているのである。やはり俊頼・俊成の言説をくりかえしている。⁽¹⁶⁾

さらに約百年後、清水浜臣（一七七六～一八二四）の家集『泊泊集』に寄せた源政醇の序文にも、「あはれ大（い）なるかも、うつせみの世よの中に有る人、高たかきも卑よしきも、老おいたるも若わかきも、なべて歌詠よむという許よりなる際は、我が大人（＝浜臣）の古こと学びの道にすぐれて勤いそしかりし事をしれり」とある。身分の上下もなく、老いも若きも歌を詠むのは日本古来の風習であって、歌を詠む人は、浜臣がそういう「古こと学び」に勤しんだことをみんな知っている、という。とすれば、浜臣の古典

学は、日本人にとって和歌とはそういうものであることを実証することであった。それは先にあげた契沖や長流などの和歌観であつて、浜臣の門弟たちもそういう和歌観を学んだわけだ。

とりわけ注意すべきは、『万葉集』と『古今集』を断絶ではなく通じ合うものとして受け止めていることだ。先に述べたが『漫吟集』の跋文に、契沖は心に思うことを見るもの聞くものにつけて自由に詠んだとあつた。『古今集』仮名序の「世の中にある人、事・業しげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、言ひいだせるなり」をふまえたものだが、江戸時代の歌人たちは、これを『万葉集』の自由な詠み方に通じるものとして受け止めた。『万葉集』と『古今集』の間には古代文学と中古文学の越えがたい段差・断絶があるとするのが今日の常識であるが、江戸時代の歌人たちはその間に通じあうものを見いだしていたのである。もう一度いえば、和歌は「心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて」自由になうたうものだ。『万葉集』を見れば、貴族も庶民も、都でも地方でも歌はそんなふうになつて詠まれていた。それが日本である、和歌である、と考へたのであつた。

これは何を意味するのだろうか。中世和歌、すなわち一部の貴族・僧侶・武士の間のみ威厳と格式をもって伝えられてきた古今伝授の弊害、つまり和歌の専有性を打ち破つて和歌と人間の復活宣言をしたことを意味するだろう。真澄はそういう時代環境に生きた旅人であり、歌人であり、民俗の記録者であつたということだ。

七 数多くの歌と声

かなり遠回りをした。最初の旅日記『伊那の中路』に戻ろう。真澄は和歌で何をしようとしたのか。この作品は、見たもの聞いたものを次々とあげ、調べたことを書き込んでいくので一貫性・統一性

があまり感じられない。雑纂性を脱却しきれず、構想が貫徹されていない印象を受ける。旅日記という外枠に依拠して、中身は自由に書き進めている。

そこで何を書きたかったのかを考えるために、くりかえし出てくる事柄をあげてみよう。

一つは、神社をこまめに訪問する記事が多いことだ。巻頭に「いそのかみかんみやしろををがみめぐり、ぬさたいまつらばや」と旅の決意を述べている。この決意は、別本である三種の異文のどれにもない。『伊那の中路』を構想したとき、新たに加えたモチーフといえよう。また『いほの春秋』『わがこころ』にもなく、『すわの海』『くめぢのはし』に出てくる。寺院への訪問もくりかえし出てくる。そういう場所を訪問し、旧知の人々に会い、地元の人々と交流し、かれらに案内されて歌枕・名所を尋ねている。

二つは、先にも述べたが西行法師への親炙である。真澄はあたかも西行のように旅をし、西行はこの地に来てこの歌を詠んだのであろうなどと思いをめぐらし、西行の歌を本歌に歌を詠んでいる。

三つは、季節の推移に沿って、和歌で詠まれる素材をとりあげて書き進めている。桜↓松にかかる藤の花↓衣更↓卯花↓山吹↓蛙↓あやめ↓五月雨、というように。勅撰集などの編纂方法と同じである。『いほの春秋』もそうであったが、さらに徹底している。そして、恋・雑に相当する場面を織り交ぜる工夫もしている。

たとえば、「異文1」（全集所収）という別本を見ると、五月二十三日は、物詣でをしてきた晴れ着姿の女が二人、雨が降り出して裾をまくり肘笠になって軒下に逃げてきた。しばらく語り合い、地元の民謡をうたいだす場面である。真澄が見たのだろうか。ところが『伊那の中路』では、軒下に男が入ってきて一人の女に恋をささやく場面に切り替わっている。恋の風情を加えた意図的な改変である。

どちらが事実なのか確かめることはできない。庶民生活を見たままに記録したというのが真澄に対する今日の評価であるが、それは正しいとしても、虚構を交えて創り上げた場面もあると思われる。真澄は軒下の男女を「ひく方にまかせて雨のふり袖もぬれてひたちのをびにかけけり」と詠んでいる。「ひたちの帯」は古来、恋の歌に詠まれてきた東国を思い起こさせる歌語である。平安後期の歌論書『俊頼髓脳』に「あづまぢの道のはてなる常陸帯のかごとばかりはあはむとぞおもふ」という歌があり、この歌にまつわる説話が記されている。それによると、常陸国の鹿島明神のお祭りの日に、求婚する男の多い女は男の名前を帯に書いて神前に並べておく。すると、結婚すべき男の名前を書いた帯が自然と裏返るといふ。この歌は『古今和歌六帖』にもあって、俊頼はそれから引用したのかもしれない。真澄は、そういう古歌の知識を豊富にもっていて、それらをふまえて恋の場面をつくって歌を詠んだと思われる。真澄の巧みな創作である可能性を捨てきれない。

真澄の詠んだ歌は「異文1」にはない。虚構の場面を加えて、いつそう東国らしい雰囲気が出るように工夫したのではなからうか。かえってそのほうが信濃国の庶民生活のありさまが親しく感じられるようになる。それもまた実録であるという理屈なのではあるまいか。近松門左衛門の「虚実皮膜」にも通じる表現法である。

四つは、不如意な生き方・死に方をした人をくりかえし登場させていることだ。『伊那の中路』において真澄が最初に記録した民俗は、後醍醐天皇の御子宗良親王を父とする尹良（ゆきよし）親王の伝説である。父宗良親王の死後、各地をさまよい、この地で殺され、かれを祭った神社があるという。『浪合記』という偽書から、「さすらへの身にしありなば住（み）もはてんとまりさだめぬうきたびの空」「おもひきやくせのふちをのがれ来てこの波あひにしづむべしとは」という二首を引用して、この伝説を紹介している。「さすらへの身」の「うきたび」は西行の旅にも、そして自分の旅にも重ねて

書いたと思われる。

同じような話はいくつもあって、身延山と対立し幕府の裁決によって伊奈（信濃国）に流された武蔵国根本寺の日樹上人を「さすらへ」「身まかり」し人と書いている。また、軽い罪を咎められて殺された女の「うらみ」と「たたり」を書き、権五郎景政、馬もろともに谷川に落ちて死んだ少年、そして、みちのくへ旅し塩竈・松島を見ぬ前に亡くなった寂好法師をとりあげている。寂好法師も旅に出て「さすらへ」「身まかる」運命を生きた人であり、そういう者たちに真澄の心が傾くところに真澄の深層心理があるといえるかもしれない。そのほか、旧知の人を尋ねたらすでに没していたこともくりかえされる。

このような不如意の人々は『伊那の中路』の前半にあらわれ、後半には出てこない。後半は、旧知の人や地元の文人との和歌による交流が多く書かれる。作品としての一貫性・統一性が少し足りないように思われる。

そのほか見逃しえないのは、さまざまな種類の和歌を詠んでいることだ。真澄は、村人の生活を描き、民俗事象を和歌に詠むことに力を入れた。さらに忘れてならないのは、村人の発する声を取りあげていることだ。子どもたちの声、はやし言葉、うたう唄、民謡。また、村人が語りかけ、それを聞き、真澄がまた語る。そういう声と出会いの場面がいたるところに出てくる。地元の文人と和歌を詠み合う交流もその中に入れてよいだろう。色紙や短冊に歌を書いて無言でやりとりしたわけではあるまい。声に出して歌を詠み合うことも大いにあったろう。真澄の旅日記は、まさに声と出会いの文学である。

こうした声の活用は、対象と作家との関係が対等であり、同じ場に生きていることを印象づける。声を発する者とその声を聞いている真澄が同じ空間に心の通う合う者どうしとして生きている。村人

の生活に密着し、参加し、人々と対話・交流している。書く側と書かれる側の分離・対立が感じられない。この時代の旅日記によく見られる、対象を突き放して冷静に記録する態度が真澄にはない。¹⁷ 観察者の目はあるが、温かい心で書いている。ここが真澄の最大の特徴といえよう。

八 宣長との類似

最後に残るのは、和歌を詠むことによって、なにゆえに民俗を記録することができるのか、という問題である。

『伊那の中路』に登場する最初の和歌の記事をとりあげてみる。まず真澄は「風越山」を見て「風越の山は名のみぞをさまれる御代の春とて花の静（か）さ」と詠んでいる。「風越の山」と名ばかりで風は吹いていない。桜は美しく咲き、世はまさに平穏、平和そのものだという祝意、いわば土地褒めの歌である。この歌は、西行の歌を引き出す踏み台になっている。

つれなう、たかねおろしさとふき来て、雪をこぼすがごとくちる桜あり。うべ西行上人の、「風越のみねのつづきに咲花はいつ盛ともなくて散らん」とながめられたる、いにしへの春のあはれもしられたり。

風がないと思ったのに、たちまち吹いてきて雪をこぼすように散った。すると西行の歌がたちまち想起されたのであった。「風越山」という山だから花盛りになる前に桜は散ってしまうのだろうよ。この歌は『宮河歌合』『山家集』にある。『金葉集』や『夫木抄』『歌枕名寄』などにも「風越山」を詠ん

だ歌はたくさん載っている。西行はそれらをふまえて一種の言葉遊びに興じたのであるが、真澄はこの歌をもちだして「いにしへの春のあはれもしられたり」と述べている。西行が見た信濃の春はこういうものだと実感できたというのである。

真澄は、目の前の風景を見て歌を詠んでいる。そこから転じて古典和歌を想起する。それによって現実の風景と古典和歌の風景が重なり入り交じる。そこに表現世界を成立させている。『伊那の中路』は自然と人々を観察し記録して完了しているわけではない。真澄が根っからの民俗観察者・記録者であるならば、こういう表現世界は築けないだろう。

以下、「遠の麓の梅は、いつちり過(ぎ)にけん」、「麓の雲のそこに鳴(く)也と時鳥をき」、「雲井に見ゆると望月の駒」、「裾野の薄、ほにいづる」、「しろたへの雪ふきおろす峰の月かげ」と季節の素材をあげて書いてゆく。これは春の「梅」「桜」、夏の「時鳥」、秋の「望月の駒」「薄」、冬の「雪」と季節の進行を示すが、すべて中古・中世の古歌をふまえている。真澄は「いにしへのあはれ」を思い起こし、古典和歌の世界にどっぷり浸^{ひた}っている。古歌の世界に浸った心をもって、二番目の歌「心して峰吹かへよ風越のふもとのさくらちりなんもうし」を詠んでいる。いくら風越といっても、よくよく注意して吹いてほしい。麓の桜が散ってしまうのは惜しいから、というのである。こうして一つの場面が完成する。

信州の春の風景を、古歌の世界に心を往復させて重層化し、複雑に、豊かに、美しく眺めて表現している。そういう目と心の方法で自然を見つめている。風景はそういう巧みな方法で表現されようとしている。

この場面は『伊那の中路』の土台となった別本の「異文1」にはない。それゆえに事実ではなく虚構だという説があるが、それは違うだろう。どちらが事実で、どちらが虚構かは決められない。決め

ることがこの作品の真の理解を助けたりしない。言えるのは、真澄はこのような表現法によって作品を築き上げたということだ。文芸作品として極めて正統な創作法である。風景、農業、養蚕、山菜採り、物詣で、民謡・童謡、正月行事、伝説、厳しい冬、人々の暮らし、そうした民俗的事象は、述べたような表現の方法を實踐して、その中に描写されて存在しているのである。

これが、旅日記を書いて生きることを決意した真澄の出発であった。『伊那の中路』は最終的に秋田に来てから成立したが（内田説）、その間に推敲を重ね、自信をもって世に問うた意欲あふれる作品、
と云ってよいだろう。

もはや言うまでもない。和歌と民俗は対立するものではなく、矛盾もしない。密接に関連するのであって、その工夫を通して和歌は詠まれ、民俗は記録された。真澄の實踐を捉え直さなければならぬ。
い。

その証左をあげて本稿を閉じることにしよう。真澄（一七五四〜一八二九）は民俗学の始祖として尊敬されているが、民俗学的な事実・知識の重要性を説いたのは、実はそれより前、本居宣長（一七三〇〜一八〇一）であった。その薫陶を受けた国学者の中山美石（一七七五〜一八四三）は平安中期の勅撰和歌集である『後撰集』を注釈するにあたって、言葉の意味がわからないとき、その実態がわからないとき、地方の言葉、地方の民俗を調べ、それをもとに注釈を試みるという方法を實踐している。¹⁹⁾

この方法の指針を与えたのは本居宣長であった。『玉勝間』の「あなかには、いにしへの言ののこれること多し」という一節がある。現代語に直しながら紹介する。

（私は、遠い国から人が来たら必ずお国言葉について尋ねる。なぜなら、方言にはみやびな古語が残っているからだ。肥後国では、今でも「見ゆる」「聞ゆる」「訝ゆる」という。都では絶えてしまっ

て、「見える」「聞こえる」「冴える」というようになった。ハイカラなふりして、古い言葉を嫌い、直させる人もいるが、それは見識のない「さかしら」だ。丹後国には蛙のことを「たんがく」というが、『万葉集』にも出てくる「たにぐゝ」の訛つたものだ。私は、「国々の詞共を、あまねく聞(き)あつめなば、いかにおもしろきことおほからん」と思っている。「かたるなかには、いしにしへぎまの、みやびたることの、のこれるたぐひ多し」。「さかしら」ぶる人は、それを改めようとするが間違いだ。「ふるき事のうせゆくは、いとくちをしきわざ」である。「葬礼(はふりわざ) 婚礼(とつぎわざ) など、こと田舎には、ふるくおもしろきこと」が多い。私は、そういう「国々のやうを、海づら山がくれの里々まで、あまねく尋ね、聞(き)あつめて、物にしるし」て残したいと思うのだ。

宣長は弟子たちに、民俗学的方法を和歌の注釈に活かせ、と教えていたのである。おもしろいことに、柳田国男が真澄を評価したのと符合することだ。宣長は、真澄のように〈海辺の村々、山がくれの里々を尋ね、聞き、集め、ものに記す〉旅はしなかつたが、そういう思いをもっていた。その方針・指導のもと、弟子たちが古典和歌の注釈に活かそうと努力したのである。

こうして見てくると、真澄もまた宣長の後継者ではないかと思われる。「国々のやうを、海づら山がくれの里々まで、あまねく尋ね、聞(き)あつめて、物にしるして」残したいという宣長の見果てぬ夢を実際に旅に出て実践したのが真澄であつたといえるだろう。宣長は地方に残る習俗や方言から古語の正しい意味や古典和歌の解釈が可能であると述べたが、真澄の随筆『布伝能麻途万珥』や『かたる袋』などには、『万葉集』『催馬楽』あるいは『新古今集』などの中世和歌に使われた言葉の意味をそういう民俗的観点から解き明かした記事がまことに多い。

たとえば『かたる袋』には、大伴家持の歌に「あゆの風いたくふくらし」(万葉集・卷一七・四〇一七)とあるが、それは松前(北海道松前町)で聞いた、舟長が北から吹く風を「あい」といつている

のと同じであろうと書いている。『布伝能麻迹万珥』では、『万葉集』の「桜麻之さくらまの 麻原乃下草まのしたくさ 早生者はやくおひは 妹之下紐いものしたひも 不解有申尾とみやらまし」(巻二・三〇四九)には、山桜の咲く本洗馬(長野県塩尻市)付近で出会った、畑に麻の種をまいている農民の話をもとに解釈している。真澄が何の種をまいているのかと聞く。「麻苧アサヲの種也」と答えた。そこで「麻のたねは冬にこそ蒔マ(く)べかりけれ」と問い質すと、農民は「今蒔きさふらふを桜麻とも花苧サクラアサとも申して、いつも春花咲くころを待ちて此あたりにてまきさふらふ事也」と答えた。それを聞いて真澄は『万葉集』の「桜麻」は「さくらあさ」「さくらを」あるいは「はなを」などと読んでよいのだと合点したというのである。

真澄は『かたる袋』に、「みちのおく、科埜(信濃)路は、分(け)ていにしへぶりいと多し。ころして見るべきところ也」と述べている。信濃、東北を旅をした理由の一つがここにあるだろう。宣長に倣って、古語の正しい意味を地方の習俗や方言から解明しようという意図をもって旅をしたのではないかと思われる。

真澄を宣長に近づけて理解する必要はない。しかし和歌と民俗を対立させ、関係のないものと見なしてはならない。真澄の著作から和歌を抹殺してはならない。和歌を研究するとき、民俗を研究するとき、これは基本的に必要なことなのである。

本居宣長記念館に宣長の「四十四歳自画自賛像」がある。畳の上に桜の枝を挿した花瓶があり、書物を広げた机の前に宣長が端座している。これとよく似た真澄の肖像画ある(秋田県立博物館蔵)。真澄の端座する後ろに机があり、その上の花瓶に梅の枝が挿してあり、閉じた書冊が置いてある。なんと対照的なことか。畳の上の桜／机の上の梅、広げた書冊／閉じた書冊、机の前の宣長／机の後ろの真澄。白を黒と置き換えたような二人の姿は、真澄の肖像画ではないとする説もあるが、真澄が宣長を強く意識していたことを示すのではなからうか。

和歌と民俗は意外と近い関係にある。真澄を民俗学の始祖、宣長を国学の泰斗、と切り離す今日の常識は、そろそろ見直したほうがいい。民俗学の研究者が真澄をその方面から理解するのは無理からぬことだが、和歌の研究者は菅江真澄をまったく無視している。『和歌文学辞典』（桜楓社）、『和歌大辞典』（明治書院）、『和歌文学大事典』（古典ライブラリー）のどれにも「菅江真澄」は立項されていない。和歌の研究者は真澄を知らないようであり、知っていても民俗学分野の人物と見なし一顧たりともしないのである。

注

(1) 内田武志によって文化八年（一八一二）から秋田藩の文人たちとの交際が始まったことが確認されている（全集の各巻「解説」。東洋文庫『菅江真澄遊覧記』全五巻の「解説」。茂木知利から那珂通博を紹介され、この年の七月中に久保田城内で藩主佐竹義和に目通りを許されたかもしれぬという。茂木は滝沢馬琴の知人で、真澄の歌を馬琴に知らせたりしている。また、高階貞房、相沢光武、広瀬有利、等々と交誼を結ぶようになった。折しも秋田藩は、幕命を受けて屋代弘賢が全国の諸藩に発した『風俗問状』にどう答えるか苦心していた。真澄はその取材・編纂・執筆のための重宝な手助けとして目に留まったと考えている。内田武志『新装版』菅江真澄の旅と日記（未来社、一九九六年四月）。内田は、真澄を低層階級の人物と見なしており、この仕事の取材などに加わったが、秋田藩にとって重要な意味をもつ神社・仏閣などの取材や執筆には関係させてもらえなかったと考えている。たとえ調査・資料収集に加わったとしても、幕府に提出する文書の執筆に、藩士ではない真澄が加われないのは当然であろう。また、真澄の身分を一種の被差別階級のごとく考えているが、私はそうは思わない。参照・注（4）の拙著。

(2) 拙著『宣教使 堀秀成——だれも書かなかった明治』（三弥井書店、二〇一二年二月）。「漂流人」と

も呼んだ。堀秀成の旅日記に、軍談（講談）をして歩く者、竹画を描いて売って泊まり歩く者などがその名称で書き留められている。旅する武術家、絵師、竹画師、書家、将棋師などもいた。旅する国学者、漢詩人もその類に入る。堀秀成は旅先で国学や和歌を教え、たまに軍談を語りわずかばかりの金銭を得たこともあった。国学を習う人々の妻や娘には手紙の書き方や習字を教えた。秀成は村や町に着くと国学を習いたい人はいないかと尋ねた。習いたい人々が宿に集まってくる。集中講義のようなカリキュラムを十日ほど講じると別の村や町へ移る。これをくりかえすうちに門弟が増える。衣食まで世話してくれる裕福な家もあらわれる。蔵書のある家を訪ねて本を読ませてもらう。やがて秀成の思想に共鳴する仲間ができる。そして「塾法」が定められ授業料を差し出す作法も定められた。堀秀成（一八一九～一八八七）の旅と人生は、約六〇年後であるが、菅江真澄（一七五四～一八二九）のそれを考えるうえで非常に参考になる。

(3) 『菅江真澄和歌 全歌編』『菅江真澄和歌 総句索引』（ともに第一版、秋田県立博物館菅江真澄資料センター、二〇〇四年二月）。真澄の歌を摘出したものではない。『菅江真澄全集』（未来社）に出てくるすべての歌を摘出して索引にしたもの。書名は適切ではない。真澄の歌を選びながら数えてみるに二千首を超えるのではないかと思われる。また、晩年の随筆『布伝能麻途万珥』『久宝田能おち穂』などにも真澄の詠んだ歌や古歌に関する記事があふれている。

(4) 拙著『なぜ和歌を詠むのか——菅江真澄の旅と地誌』（笠間書院、二〇一一年三月）。「Ⅱ 真澄の旅——なくてはならない和歌」、「Ⅲ なぜ地誌を書いたか——藩主とのかかわり」に、真澄の歌に対する柳田の批評をとりあげて論じた。

(5) 全五巻、平凡社、一九六五年四月～一九六八年七月。現在は、平凡社ライブラリーにも収められている。内田の「解説」を読むと、真澄と和歌のかかわりをかなり具体的に詳しく書いている。また、全五巻の編集方針を「和歌の多くを除き、資料としての価値のあるところを現代文になおし、また菅江真澄についての詳細な研究と、その足跡および著者の解説を加えて読者の理解をたすけることにした」と述べており、民俗学の価値ある資料として編み直すという意図があったことがわかる。

(6) 『伊那の中路』の本文冒頭に、「あめの光よもにあげらけき御世の、おほんめぐみあまねくみつといふとし（天明三年）、長閑き春もきさらぎの末つかた、たびごろもおもひたち父母にわかれて、春雨のふる

里を袖ぬれていで、玉匣ふたむら山（愛知郡豊明町）をよそに三河路を離て、雨にきる三野（美濃）のなかやまをかなたに、みすずかる科埜（信濃）の国に入つる」とある。序文には「天明三（一七八三）年癸卯のやよひより、しなの、国をわけて、もとせばといふ里に在て、月はしはすに至るまでをのす」とある。天明三年二月末に三河国を出て、三月に信濃国に入り、一二月まで本洗馬で過ごした日々を記している。

(7) 拙著『宣教使 堀秀成——だれも書かなかった明治』（三弥井書店、二〇一二年一二月）。

(8) 文化一一年一〇月二〇日付けの佐藤太治兵衛あての書翰（全集一二巻）に、真澄の旅日記ほかを秋田藩校の明徳館に差し出すことになり、秋田藩主佐竹義和の目にふれるかもしれぬことを喜んでいる。

「当 館様ノご覧ニ御座候哉、若又京都近衛様などより申参候而、公方様など御上覧被遊候にや」。「公方様」は朝廷、あるいは幕府將軍だろうか。「小子下賤之身にとりていづれにも大悦身にあまり候」と喜びを露わにしている。旅日記も高貴な方々に読まれることを期待して書いたのではないか。

(9) なお、藩主が農民の働く姿を見て歌を詠むのは、全国の各藩でよくあることだった。藩主の義務であったといったというべきだろう。真澄を認めた秋田藩主佐竹義和（一七七五―一八一五）の和歌を詠みながら綴った領内巡覧記「千町田の記」を読むと、まじめに生きる農民たちに謁見・表彰し、かれらの働く田園風景を歌に詠んで歩いている。それは「養老律令」以来の領主・義務であった。拙論「藩主の巡覧記——仙台藩主と秋田藩主」（白幡洋三郎・錦仁・原田信男編『都市歴史博覧——都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ』笠間書院、二〇一一年一二月）。藩政にとりくむ藩主たちが肝に銘じたのは『書経』に典拠のある「民は国の本」という治政思想であった。これは五代將軍徳川綱吉に対する朱子学者、佐藤直方（一六五〇―一七〇九）の講義録『韞蔵録』にも見られる。若尾政希「幕藩制の成立と民衆の政治意識」（『新しい近世史⑤ 民衆世界と正統』新創社、一九九六年二月）など。幕府が諸藩に向けて指示した政治思想であったわけだ。幕府老中で白河藩主となった松平定信（一七五八―一八二九）も再三力説したことは『楽翁公遺書』（八尾書店、上巻、一八九三年八月。中・下巻、同年一月）に収められた著作を読むとよくわかる。真澄が農民の生活を観察し記録すること自体はそれほど特殊なことではない。その観察・記録の特質とレベルが問題なのである。

(10) 真澄は生涯にどれほど歌を詠んだのか正確には数えられないが、注(3)に述べたように二千首を超

えるものと思われる。

(11) 随筆集の『久宝田能おち穂』（一八二二年成立）と『布伝能麻迹万珥』（一八二四年頃）で述べている。ほぼ同文である。参照・注（4）の拙著。

(12) 『菅江真澄遊覧記』の解説。内田の真澄観である。注（11）の拙著八六頁に述べた。

(13) 真澄は『蝦夷喧辞辨』の五月二日条に、「アイヌ語で「アキノヤタ、キモロヲシマケタ、ニイヤノニ、ノチケリアンベ、レタヌウカラ」と二種の和歌を詠んでいる。「アキノは蝦夷、ヤタは磯、キモロは山、ヲシマケタは物の陰、ニイヤは桜、ニは木をいひ、ノチケは盛りを、リアンベは近き磯の浪、レタルは白きをいひ、ヌウカラは見るといふこゝろモテ、しかいはば、ゑぞのすむいそ山かげのさくら花さかりをなみの寄るところ見れ」。両方とも内容はまったく同一。和歌はアイヌ語でも詠めるし、そのまま通常の和歌にできることの証明になっている。もちろん遊びである。これも真澄の得意なことだった。

(14) たとえば、七代庄内藩主・酒井忠徳。宮部義正・冷泉為泰・烏丸光胤・日野資枝などに和歌を習ったが、和歌も俳諧（発句・連句）も好み、階層を超えて交遊した。

(15) 契沖は「此集（『万葉集』）をば、此国にては、詩経に準ずべし。いはんや詩（『漢詩』）は唐虞（『堯・舜の時代。中国史上の理想的太平の世とされる。『広辞苑』）より起り、歌は神代にはじまる。久近はるかにへだ、れり」（『万葉代匠記』（初稿本）惣釈（抄）。日本歌学大系）と述べている。国学的な誇張であるが、和歌は神代に始まり今日へ続いており、堯・舜の時代に始まった漢詩より遙かに古いという。『詩経』は中国最古の詩集で、黄河流域の諸国の民謡を集めたもの。地方庶民の歌まで広範に載せる。『万葉集』を『詩経』と同じと見て漢詩と和歌を同等としている。こうした言説の淵源は『古今集』仮名序であり、平安後期の歌論書『俊頼髓脳』の冒頭部はそれを具体的に述べ直している。平安末期の藤原俊成が勅撰集『千載集』仮名序は、俊頼の言説を冒頭部にそのまま継承している。江戸期は、下河辺長流の撰集『林葉累塵集』序などにそのまま受け継がれている。なお、藤原俊成と同時代の藤原清輔の歌学書『袋草紙』には、僧侶・小児はいうに及ばず乞食も亡霊でさえも歌を詠むことが記されている。

(16) 拙論「和歌の思想——俳句を考えるために」（『俳句教養講座第二巻 俳句の詩学・美学』角川学芸出版、二〇〇九年十一月）、『東北地方諸藩の和歌活動と歌枕・地誌との関係を解明する新研究』（科研費研究成果報告書、二〇一四年三月）、『和歌の思想・言説と東北地方における芸能文書との影響・交流につ

いての研究——和歌における〈外部〉とは何か——」（科研費研究成果報告書、二〇〇八年三月）など。
(17) その最たるものは、古川古松軒の『東遊雜記』（日本庶民生活史料集成・第三卷所収）であろう。村人の服装や生活を細々と記し、村人の文化・教養・道徳のレベルが低いことを批判し叱責する記述があげられている。とりわけ外様大名の藩には厳しい記述をしている。いずれ老中の松平定信に提出するものであったので、その傾向が増長したように思われる。

(18) 数例をあげると、「遠の麓の麓の梅は、いつちり過（ぎ）にけん」は、「梅の花遠（をち）の麓に咲きにけり匂ふにしろき風越の山」（千五百番歌合・公継）をふまえたもの。〈公継の古歌に、「風越山」から風が吹いてきて麓では梅の花の香がただよっている、とある。季節も同じだし、山から風も吹いているが、はてさて、香はしない。いつ散ってしまったのであるか」という意味をこめている。和歌を知る人の、和歌を詠む人の自然観照と文章表現である。「麓の雲のそこに鳴（く）也と時鳥をき、」は、藤原清輔の「風越を夕超えくれば時鳥（ほととぎす）ふもとの雲の底に鳴くなり」（今撰集・歌枕名寄）。「雲居に見ゆると望月の駒をおもひ」は、中原頼行の「風越の峰をはるかに引く時は雲井に見ゆる望月の駒」（夫木抄）。「裾野の薄、ほに出づるを手酬（たむけ）にと聞え」は、西行の「穂にいづる深山が裾のむら薄籬（まがき）にこめて囲ふ秋霧」（山家集）。「白妙の雪ふきおろす峰の月影」は、藤原清輔の「白妙の雪ふきおろす風越の峰より出づる冬の月の夜」（清輔集・歌枕名寄）。これらの古歌を真澄は「ふるごと」とよび、「ずして」（誦^ずんじて）つまり声にだしてうたいながら歩いたのである。全集でいえばたった三行なのに、このように古歌を充満させている。いずれも季節の順に歌語（素材）を出し古歌を内包・想起させる。すなわち古歌を下敷きにした表現である。平安期の文章を真似た擬古文というわけではない。むしろ江戸期の俳文（または俳文的な随筆）に近い。こうした文章表現は、旅から居室に戻った机上での産物であろう。真澄の机上には『夫木抄』『歌枕名寄』などがあって、見ながら確認しながら書いたのである。

(19) 玉田沙織「一九世紀日本における注釈書の形成——本居派国学者中山美石の『後撰集』研究方法——」（H E S T E C 四巻一号、二〇一〇年）。玉田氏は英文で書いている。本人による日本語訳も発表されている。なお、石井正己と新野直吉による「対談記録 北東北、歴史と文化と魅力——」（『真澄研究』一五号、二〇一一年三月）に本稿と関連のある見解が述べられている。

(20) 福田アジオ『日本民俗学の開拓者たち』（日本史リブレット 山川出版社、二〇〇九年八月）。福田氏は同書を執筆するにあたって、「民俗学をどのように位置づけるかについては、本居宣長が、地方の言葉や行為には古いあり方が示されていると、その価値を発見し、調査をして記録することの期待を表明した。それに対して、実際に民俗を把握し、記録作成に向かった人びともいる。旅のなかで、いく先々の生活にふれ、民俗を発見した菅江真澄、居住する地域の生活を観察し、記録した鈴木牧之、あるいは日本全体に調査用紙を配って系統的に年中行事を中心とした民俗を収集しようとした屋代弘賢などがいる」と述べている。福田氏の見解は、今日の民俗学における常識といえよう。

なお付け加えれば、幕府派遣の巡見使たちが旅先における見聞を書き記した紀行日記の類も、各地の民俗をはじめ和歌・漢詩・俳諧に詠み込む名所やそれにまつわる伝説等を詳述している。そして、そこに書き記された民俗や名所の記事は、各藩の藩撰・私撰の地誌にも書き記されることになった。和歌（文芸）と民俗そして地誌は意外なほど親近の関係にある。

【附記】

本稿は、平成二四年九月一日、学習院女子大学で開催された伝承文学研究会において、「和歌と民俗——菅江真澄『いなななみち』の方法」と題して講演したものである。